【主題】地球規模の問題に目を向け、自ら行動を起こし、主体的に学び続ける子どもの育成
― 人や事象との出合わせ方を工夫し、体験に重点を置いた４年生総合的な学習の時間 ―

三条市立栄中央小学校
教諭　名古屋　康秀

１　はじめに

本研究の出発点は、「グローバルに活躍する日本人を育成したい」という筆者の願いである。

文部科学省(2011)の「グローバル人材」の概念を整理すると、概ね、以下のような要素が求められる。

要素Ⅰ：	語学力・コミュニケーション能力
要素Ⅱ：	主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
要素Ⅲ：	異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

筆者は、民族・人種・国家・思想・宗教などの枠を超えて物事をとらえ判断し、実行できる人材の育成に努めたいと考えている。

２　主題設定の理由

本学年の子どもたちは、素直で、従順で、学習に対してまじめに取り組むことができる子が多い。しかし、自ら課題を見つけ、自ら考え、行動を起こそうという主体性・積極性に課題が見られる。

本研究では、バングラデシュが抱える課題を知り、自分たちにできることを考え、行動を起こすことをねらいとしている。バングラデシュ出身で新潟県在住の A さんは、母国に学校を設立し、学校を運営するため支援し続けている。A さんの活動に興味を示し、活動していく中で、課題を見つけ、考え、行動する主体性を育み、自分が世界に役立つ充実感や満足感を得て、自信へとつなげてほしい。

３　研究の仮設と方法

本研究は、グローバル人材に求められる要素のうち、「主体性・積極性」と「異文化に対する理解」の２要素の育成に特に重点を置く。なぜなら、これらの要素を育てることで、他要素も付随して育まれると考えるからである。A さんとの関わりや友達との話し合いの中で、コミュニケーション能力や協調性が養われるだろう。また、日本と比較しながら異文化を理解していく過程で、自国の文化を再認識し、日本人としての誇りをもつことにつながる。さらに、A さんやバングラデシュの子どもたちを支援する使命感・責任感をもって活動するだろう。

いかに「異文化に対する理解」を深めながら「主体性・積極性」を持続できるかが、本研究の肝となる。バングラデシュが抱える貧困問題に目を向け、自ら行動を起こし、主体的に学び続ける子どもの育成をめざし、次のような手立てを講ずる。

〇事象や人(A さん)との出会わせ方を工夫する。

記事・映像・メッセージなどを通して現実に目を向け、A さんの活動の価値を理解し、自分ごととして捉えるならば、自ら行動を起こし課題解決に向けて学び続けるであろう。

〇国際交流を行い、A さんと親しくなることにより、A さんを通して異文化を理解する。

A さんと一緒に遊んだり、カレーを試食したりしながら、A さんに親しみをもつことができたならば、A さんの言動の根本となるイスラム文化に対しても受容的に理解することができるであろう。

〇自分たちで考え、選択し、実行する。

活動方法は、自分たちで考え、関係者に子どもたちが直接問い合わせ、お願いをすることで、責任感をもって行動することができ、主体性が育まれるであろう。

４　実践の概要

学年：４年生(43 人)

教科：総合的な学習の時間「自分が変わる、世界が変わる」

（１）　洋服生産国を通して、バングラデシュを知る。(第１次)

①　身近なものをきっかけに、外国に興味をもつ。

本単元の始めに、筆者は「普段着ている自分たちの洋服はどこで作られているだろうか。」と子どもたちに問いかけた。子どもたちからは「日本・中国・アメリカ」など主要国の声が挙がった。そこで実際にタグを調べてみると、日本やアメリカはなかった。代わりに、「バングラデシュ・カンボジア・マレーシア」など聞き慣れない国名が出てきた。子どもたちから、「タグに出てくる国はどんな国なのか。」、「なぜ、日本で着るのに日本で作らないのか。」という興味や疑問が湧いてきた。

② 想像と違う現実に衝撃を受ける。

いくつか出てきた製造国の中で、特に興味をもった国が「バングラデシュ」である。子どもたちは、初めて聞く名前に興味を示した。バングラデシュは、日本よりも洋服の技術が進んでいて、高層ビルが立ち並び、おしゃれで近未来的なのではないかとのイメージをもっていた。しかし、実際に調べてみると、人々が密集し、混とんとした街の様子で、思い描いていたものとの違いに驚いた。「イスラム」・「ムスリム」という言葉をよく目にした。ニュースで聞いたことがある程度で「イスラム」や「ムスリム」について知らないことばかりだった。調べていくうちに、お酒を飲まない、豚肉を食べない、ラマダーンで日中は食べないなど自分たちの生活とは全く違う習慣に驚いた。中でも手を使って食事をしたり、トイレットペーパー代わりに手を使ったりする習慣があることに驚いた。中には抵抗感や嫌悪感をもつ子もいた。(写真1)そこで、文化に優劣がないことを理解するために、A さんから直接話を聞いたり、文化を体験したりすることにした。

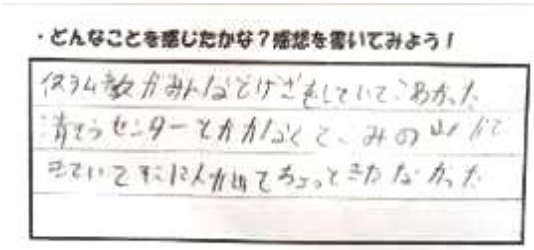


写真1：イスラム教に対して恐怖心をもつ児童Aの感想

③ A さんと出会い、国際交流を体験する。

A さんは30年前に来日し、国際結婚をし、現在新潟県に在住している。日本文化をこよなく愛し、空手の師範でもあり、自身の教室を開いている。笑顔で、明るく、ユニークなA さんに子どもたちはすぐ親近感をもった。A さんからバングラデシュの文化やイスラムについて教えてもらった。(写真2)子どもたちは、伝統的な遊びを楽しみ、民族衣装を試着し、カレーを試食させてもらった。子どもたちは、体験的な国際交流を通して日本との類似点を見つけることができた。国旗が似ていること、稲作が盛んであること、日本語に似た言葉が使われていることである。直接、A さんと交流する体験を通して、子どもたちは、異文化理解を深め、以前に抱いていたバングラデシュのイメージに変容が見られた。

写真2：民族衣装を着る体験の様子

（2） A さんの活動の意義を理解し、自分ごとに捉える。(第2次)

本単元は「バングラデシュの子どもたちへの支援活動」をねらいとしている。バングラデシュに親しみをもった子どもたちが自ら行動を起こすためには、外国で起きている事象や問題をいかに自分ごととして捉えることができるかが肝要である。筆者は、子どもが主体的に「この問題は、自分も関わっている。解決したい。」と思うまで、子どもの意識を高めたいと考えた。そのため、バングラデシュが抱える貧困問題、児童労働の現実を知った上で、活動の意義を理解し、A さんの覚悟や決意に共感できるような手立てを講じた。

A さんは、2016年、母国に小・中学校を設立してから、現在もなお学校を運営していくために、毎月多額の支援金を送っている。そこで、A さんが活動を行う背景を知ることから始めた。

まず、筆者が提示した記事をもとに、具体的な数字や表を読み取ることを通してバングラデシュと日

本を比較した。子どもたちは貧困や児童労働の実態に気が付いた。

次に、バングラデシュに行ったことのあるＢさんをゲストティーチャーに招いて解説を聞いた。映像を通して、子どもたちはバングラデシュの現状を具体的に理解した。

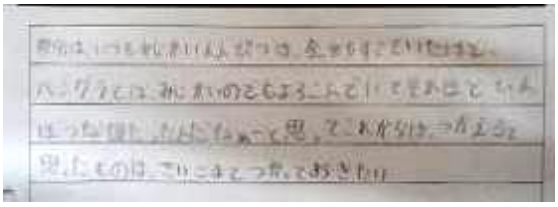


写真３：自分の生活を見直そうとする児童Ａの感想

上の写真３は、はじめはバングラデシュという国に対して抵抗感をもっていた児童Ａの学習後の感想文である。児童Ａは、学習を通して自分の生活を見直そうという意思を示した。最後に、Ａさんからのインタビューをもとに教材にして提示し、「自分だったら、どうするか。」を考えた。子どもたちは、自分の生活を犠牲にしてまで、支援を続けるＡさんに感銘を受け、自分たちも何か行動を起こしたいという気持ちを高めた。

また、児童Ｂは、バングラデシュという国の実態やイスラム文化の習慣を知り、抵抗感をもっていた。しかし、エラヒさんの活動やエラヒさんの自己犠牲の精神に感化され、使命感をもった。この時から意欲的になり、今後行っていく資金集めにも積極的に参加するようになった。

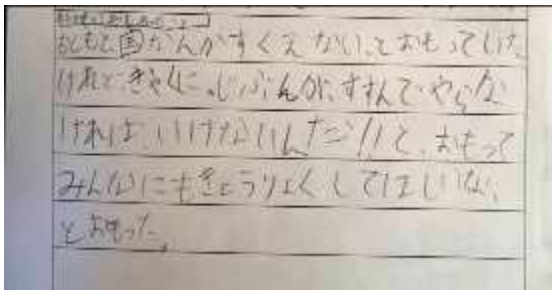


写真４；　支援に積極性を見せる児童Ｂの感想

（３）　自分たちにできること（第３次）

ここから子どもたちは、自分たちにできることは何かを考え、行動を起こす。しかし、様々な課題や困難にぶつかることになる。最初に考えた支援方法は、使い古しの文房具や洋服、生活用品を送ることだ。しかし、感染症拡大のため輸送することが厳しいこと、輸送費に多額のお金がかかることが分かり、断念せざるを得なかった。

次に考えたことは資金を集めて送ることである。資金を集める方法を調べると、アルミ缶を買い取ってくれる業者が市内にあることが分かり、直接電話で問い合わせた。１kg 115 円で、10ｋｇから買い取ってくれることが分かった。

写真５：業者に問い合わせる児童と学年で集めたアルミ缶

アルミ缶は１つ５ｇであり、４年生だけでは５kg程度しか集められなかった。10ｋｇを集めるのは予想以上に難しかった。また、10 kgであっても 1150 円にしかならない。学校支援のためにはもっと多くの資金が必要である。そこで、全校児童や家庭、地域に呼びかけ、協力してもらうことにした。まず学習発表会を通して、バングラデシュやイスラム文化への理解を深めてもらい、次にアルミ缶収集のお願いをすることにした。

（４）　みんなとできること（第４次）

学習発表会では、今までに学んできたことをテーマごとに分けて発表した。「バングラデシュ」や「イスラム文化」を初めて耳にする人もいるだろう。その人に理解してもらうためには、どのように発表すればよいのかを考えた。子どもたちは、クイズや紙芝居、ペープサートなどを通して楽しく理解を深めてもらうことが大切だと考えた。スライドを工夫したり、民族衣装を着たりして発表をした。

写真６：学習発表会の様子

参観した保護者から「バングラデシュのことをよく調べていて驚いた。４年生の団結する姿に感心した。」という感想をいただいた。

次に、他学年や家庭、地域に呼びかけるために、「アルミ缶収集プロジェクト」を立ち上げた。プロジェクト期間を１週間設け、前の週を呼びかけ週間としてアピールした。児童が作成したお便りを配布し、ポスター掲示、放送での呼びかけを行うことにした。

下記の写真８・９は、教職員や家庭を対象にお願いの文書を届けたり、放送で呼びかけたりしている様子である。左写真10は、近くのスーパーでアルミ缶収集プロジェクトの協力を依頼している様子である。スーパーの責任者の方から、「アルミ缶の収集場所に、わが社を選んでくれてありがとう。精一杯協力させていただきます。」と言ってもらった。子どもたちは、自分たちの活動の価値を自覚し、周りの人が協力してくれることへの喜びと感謝の気持ちをもつことができた。活動に対して、よりいっそう使命感や責任感、有用感を感じることができた。

写真８

写真９

写真10

アルミ缶収集活動は１週間行い、合計73 kgのアルミ缶を収集することができた。子どもたちは、主体的に取り組み、自信につながった。

写真11　アルミ缶収集の様子

５　成果と課題

（１）成果

自ら行動を起こし、主体的に学び続ける子どもの育成をめざして、これまで実践を行ってきた。はじめは、「バングラデシュ」に馴染みのなかった子どもたちが国や文化に興味をもち、A さんとの出会いの中で異文化を深めてきた。無関心であったり、抵抗感をもっていたりした子も、A さんと出会い、A さんの思いに共感し、活動の意義を認識していく中で、考え方に変容が見られた。自ら行動を起こし、主体的にかかわることができた。そして、自分たちは世界や社会とつながっており、一市民として行動を起こせた成功体験や、他の人に協力してもらえたという感謝の気持ちをもつことができた。児童Ｃは活動を次のように振り返った。

> 色々トラブルがあり、うまくいかないこともあったけれど、他の学年や親たちに伝えたいことを言えたかと思います。今までの総合の中で一番心に残りました。A さんと A さんの奥さんが来てくれたことでこの学習ができたと思います。楽しかったです。

A さんとの出会いが子どもたちをここまで成長させてくれた。そのことを子どもたち自身も自覚していた。

（２）課題

アルミ缶収集が終わったが、子どもたちは、資金を集める方法が他にないか探している。少しでもバングラデシュの子どもたちのために資金を集めたいという気持ちが高まっている。今後、第２回のプロジェクトを企画していきたい。

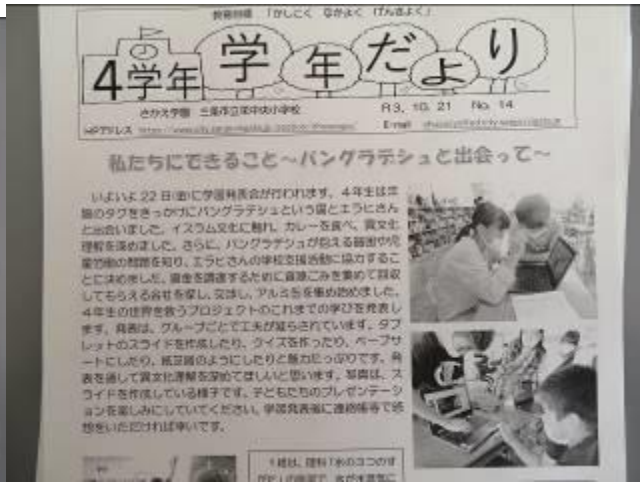
また、本研究は学年に終始する実践であったが、今後は、学校全体で取り組んだり、他校や関係機関と連携したりして活動を広げていきたい。

６　おわりに

世界は持続可能な未来の構築に向けて重要な局面を迎えている。日本も SDGs に向けて大きな役割を担っている。また新型コロナウイルス感染症の収束が未だに見えない状況下で、国を超えて課題解決に向かわなくてはいけない。民族・人種・国家・思想・宗教などの枠を超えて物事をとらえ判断し、実行できる人材の育成が急務である。今後も、グローバルに活躍する日本人を育てていきたい。

4学年 学年だより

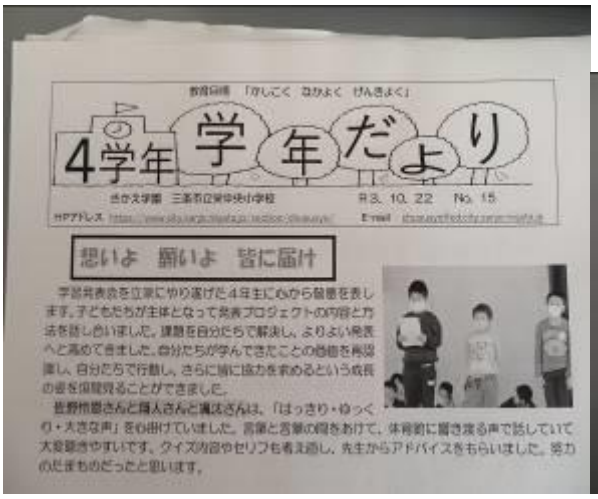
エラヒさん！ありがとうございました！



4学年 学年だより

さかえ学園 三条市立栄中央小学校 R3. 10. 21 No. 14

私たちにできること～バングラデシュと出会って～



4学年 学年だより

さかえ学園 三条市立栄中央小学校 R3. 10. 22 No. 15

想いよ 願いよ 皆に届け

4学年 学年だより

衣、食から異文化理解 三条・栄中央小

バングラデシュ題材に

三条市の栄中央小学校4年生43人が、バングラデシュやイスラム文化について学んだ。子どもたちは民族衣装を着たり、本格カレーを食べたりして楽しみながら異国への理解を深めた。

9日の授業は、バングラデシュ出身で見附市の会社員モハメッド・ヌルル・エラヒさん(51)と妻の幸恵子さん(71)が講師を務めた。

エラヒさんは2017年、母国に学校を建設した縁で、建設の際も協力した栄中央小の佐藤義朗校長(58)と長年交流があり、招かれた。

子どもたちは「バイジャマー」「サリー」など民族衣装の特徴について説明を受け実際に着たほか、スパイスが効いたインディカ米のカレーも試食。「見たことがない米の形でびっくりした」などと感想を述べた。

また、イスラム教のラマダン(断食月)には、厳しく食べることができない人の気持ちを理解するといった意味があることも学んだ。

小林容瑛君(9)は「民族衣装はカラフルな色が多かった。カレーはピリ辛でおいしかった」と喜んでいた。

バングラデシュの民族衣装を試着する子どもたち＝三条市の栄中央小